

ところが、人々は、イエスを十字架につけるように大声で叫んでやまなかった。そしてついに、その声がまさった。そこで、ピラトは彼らの要求をいれる決定を下した。つまり、暴動と殺人のかどで投獄されていたバラバを要求どおりに釈放し、イエスを彼らの求めるままに十字架へと引き渡したのである。(ルカ23:23～25)

イスラエルの最高法院は、主イエスに死罪に当たる神への冒瀆罪を強引に引き出した。石打ちの刑で死刑にすることは可能であったが、自分たちの手で執行すると、主イエスに篤い尊敬と支持している民衆の反発を買うので、ローマの総督ピラトの手で執行させようと、ローマに反逆する政治犯として訴え出た。ピラトは尋問するが、政治的野心を持つ者とは思えなかった。政治的野心を持つ者であるならば、主イエスに従って革命を起こす仲間、部下がいて当然だが、そんな気配は全くなかった。宗教家同士の妬み、争いと見抜いていたのである。尋問中、ガリラヤで民衆を扇動していると聞き、そうならば、ガリラヤの領主ヘロデに裁いてもらおうと、ヘロデのもとに送った。ヘロデは主イエスに会って喜び、主イエスが起こす力ある徴を見たいと望んだが、何の徴も見ることではできなかった。打ち叩かれ、血まみれの弱々しい主イエスを見て、政治的な革命を起こす者には見えなかったので、ピラトの所に送り返した。ピラトは祭司長たちと最高法院の議員たち、また、集まっていた民衆に向かって、「あなたがたは、この男が民衆を惑わしているとして私のところに連れて来た。私はあなたがたの前で取り調べたが、訴えているような罪はこの男には見つからなかった。ヘロデもそうだった。それで、我々のもとに送り返してきたのだ。この男は死罪に当たるようなことは何もしていない。だから懲らしめたうえで釈放しよう」と語りかけた。ピラトは強権を持ってユダヤを支配していたが、主イエスに関しては、有能な行政官らしく、冷静な判断を下している。ところが、人々は一斉に、「その男は連れて行け。バラバを釈放しろ」と叫んだ。バラバはエルサレムで起こった暴動と殺人の罪で投獄されていた。彼はローマに反抗する罪を犯し、十字架刑になる男であった。ピラトは主イエスを釈放しようと呼びかけたが、人々は、「十字架につけろ、十字架につけろ」と叫び続けた。ピラトは三度目に、「一体、どんな悪事を働いたというのか。この男には死刑に当たる罪は何も見つからなかった。だから、懲らしめたうえで、釈放することにしよう」と語りかけた。ところが、人々は、主イエスを十字架につけるように大声で叫んでやまなかった。この場に集まっていた民衆は主イエスに尊敬と支持を寄せていた民衆ではなく、当局によって主イエス殺害を扇動されていた人々であろう。当局と民衆の声は、ピラトの釈放しようとする説得に勝り、彼らの声を受け入れざるを得なかった。ピラトは、主イエスを釈放する権限を持っていたので、無罪を宣告することはできたが、暴動と殺人の罪で投獄されていたバラバを釈放し、当局の要求通りに、主イエスを十字架刑の執行を言い渡した。当局が目論んだ通りに事が運んだのである。

当時、ピラトの後ろ盾であったローマの高官が失脚させられ、彼はかつてのような強権を振るうことができない状況であったという説もある。いずれにしても、彼は当局からの圧力に押され、自分の判断を押し通すことができなかった。使徒信条では、「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ」と、ピラトの名は主イエスを十字架につけた人物として、教会で語り継がれている。